

『出雲国風土記』の写本について

奈良時代に編纂された『出雲国風土記』の原本は現在では失われ、今は「写本」という形で伝わっています。『出雲国風土記』の写本は、全国各地に約一〇〇点あまりが分散されて残っており、島根県内に現存しているのはそのうちの二六点です。『出雲国風土記』の写本には大きく分けて、次のような二つの系統があります。

一つは、『出雲国風土記』本文の写本です。それらのうちで現在最も古いものは、慶長二年（一五九七）の熊本県にある永青文庫所蔵の写本です。島根県で最古のものは、江戸時代の寛永十一年（一六三四）に尾張（現在の愛知県）藩主・徳川義直が日御碕神社に寄進したものです。

二つめは、『出雲国風土記』の代表的な、そして現存最古の注釈書である岸崎時照著『出雲風土記抄』の諸写本です。著者である松江藩士・岸崎時照が、いろいろな役職を歴任し、出雲国内をめぐった中で、天和三年（一六八三）に著したもので、本文を引用したのち、解説を加えています。地理的な説明に信頼性が高いものです。

三つめは、内山真龍著『出雲風土記解』の諸写本です。これは、遠江国（現在の静岡県）の国学者であった内山真龍が、天明六年（一七八六）に出雲を訪ね、各地を視察し、翌年に著したものです。多くの写本と比較研究し、最初の国字



左より日御碕神社本・吉岡氏本・郷原氏本・吉岡氏本

的解釈をしたもので、その後の写本に大きな影響を与えました。今のよつに「J」機のない時代ですから、写本はもろろ々、すべて手書きで写されます。そのため元の本と写本との間に、書き写し時に細かな違いがいろいろと生じます。そこで、さまざまな写本の違いを見比べ、『出雲国風土記』の原文の姿に近づけていく研究が行われています。本巻も、二つした研究のうえに成り立っているのです。

あごかき 『出雲国風土記』と現在の風景

本巻を編集するにあたり、『校注出雲国風土記』を片手に、すべての山、川、海などを見て歩きました。『出雲国風土記』は、奈良時代の各部の役人が地勢や産物を記した、言うなれば地誌です。私たちが今、二〇〇年以上前に書かれた地誌と現代の風景を重ねて見ることができるといふのは、実は限らない幸運のためです。たいてい、今あらためて実感しました。

第一の幸運は、『出雲国風土記』が、写本ながら完全な形で現存していることです。風土記が完全な形で残っているのは出雲のみで、部分的に残っている国もわずか四つしかありません。二二〇年前の景色を、時を越えて今に再現できるのは、島根県だけなのです。

第二は、風景が古代から変わらず今に残っていることです。何の変哲もなく見える山や川でも、『出雲国風土記』を通じて見る、さまざまな思いがめぐります。たとえば山ひとつとっても、「三方磯（せ）岩（なり）」

とあれば、実際に岩がそびえ立っているのが見え、「やっばり」の山に違いない」と確信する。目の前にある同じ岩を、古代の人が特別の想いを持って見たのだと考えるだけで、胸がいっぱいになります。これが都会なら、開発で消えた山や川も多くの高層建築でまわりの景色がほとんど見えなくなっていたでしょう。

三つめの幸運は、地名が非常に多く残っていることです。『出雲国風土記』に記されている山や川、集落などが、現代の地名にあたるのかを考えるうえで、記された方位や距離とともに地名は大きなヒントとなります。島根県では、『出雲国風土記』に記された地名が、そのまま残されていることが少なくありません。地名も「隠れた文化財」であることを、あらためて思い知らされます。これらいくつもの幸運が重なって、『出雲国風土記』は現代にいきいきとよみがえるのです。

『出雲国風土記』をガイドブックに島根の自然や風物を見

直す、二二〇〇年の年月を

越えて残る風景には、それが持つ本来的な美しさ以上に、歴史の重みをひしひしと感じます。自然や歴史的風土があつてはじめて現在があることに気付いたとき、何の変哲もない景色が、新たな感動を持った別のものとなって見えてくるのです。そんな思いを、この巻を読んだみなさんにも感じてもらいたいと思います。

用語の手引き

- ・ 国司（こくし） 奈良・平安時代、中央の貴族が、数年の任期で各国に派遣され、地方の政治をとった。
- ・ 国庁（こくちやう） 国司が政治を行う役所。現在の県庁にあたる。
- ・ 郡司（ぐんじ） 国司の下で、多くは大化改新以前に国造であった豪族の中から任命されて、政治を行った。
- ・ 郡家（ぐんけ） 郡司が政治を行う役所。現在の市役所・町村役場などにあたる。
- ・ 駅家（つまや） 風土記の時代、都と地方を結ぶ道に三〇里ごとに置かれ、役人が乗り継ぐための馬や食料を提供した。都と地方を公用で往來する役人が使用できた。
- ・ 軍団（ぐんだん） 農民の兵士を訓練して非常時の防衛に備えたところである。
- ・ 烽（とびひ） 非常の時にのろしをあげて急を伝える施設で、出雲国には五つあった。
- ・ 加藤義成（かとうよしなり） 一九〇五～一九八三。大原郡加茂町出身。『出雲国風土記』を国語学的に研究した。著書に『修訂出雲国風土記参考』『校注出雲国風土記』『校本出雲国風土記』など。

*もっと知りたい人のために

(1) テキスト

- ・ 加藤義成『校注出雲国風土記』今井書店 一九七五
- ・ 秋本吉郎『風土記』『日本古典文学大系』岩波書店 一九五八
- ・ 久松潜一『風土記』『日本古典全書』朝日新聞社 一九五九・六〇
- ・ 吉野 裕『風土記』(東洋文庫) 平凡社 一九六九
- ・ 小島環礼『風土記』(角川文庫) 角川書店 一九七〇

(2) 一般書

- ・ 田川美穂『神々のくに、そのくにびと』中国新聞社 一九九二
- ・ 川島美英子『こども出雲国風土記』山陰中央新報社 一九九四
- ・ ザ・出雲研究会編『フシギ発見の旅ガイドブック出雲国風土記』一九九五

(3) 解説書・研究書

- ・ 平泉澄監修『出雲国風土記の研究』出雲大社 一九五三
- ・ (皇學館大學出版部 一九七四)
- ・ 加藤義成『修訂出雲国風土記参考』今井書店 一九八一
- ・ 加藤義成『風土記時代の出雲』今井書店(一九六二) 一九八一
- ・ 秋本吉郎『風土記の研究』ミネルヴァ書房 一九六三
- ・ 水野 祐『出雲国風土記論攷』早稲田大学古代史研究会刊 一九六
- ・ 水野 祐『古代の出雲』吉川弘文館 一九七二
- ・ 佐藤四信『出雲風土記の神話』笠間書院 一九七四

四

- ・ 上田正昭編『風土記』社会思想社 一九七五
- ・ 門脇禎二『出雲の古代史』日本放送協会出版 一九七六
- ・ 加藤義成『風土記にみる古代出雲』山陰中央新報社 一九八
- ・ 関 和彦『風土記と古代社会』塙書房 一九八四
- ・ 石塚尊俊『古代出雲の研究』佼成出版社 一九八六
- ・ 田中卓著作集。『出雲国風土記の研究』国書刊行会 一九八八
- ・ 瀧音能之『風土記説話の古代史』桜楓社 一九九二
- ・ 上田正昭編『古代を考える 出雲』吉川弘文館 一九九三
- ・ 関 和彦『日本古代社会生活史の研究』校倉書房 一九九四
- ・ 瀧音能之『王・民・神々』名著出版 一九九四
- ・ 瀧音能之『出雲国風土記と古代日本』雄山閣 一九九四
- ・ 山本清編『風土記の考古学』出雲国風土記の巻 同成社 一九九五
- ・ 朝山 皓『出雲国風土記水産攷』
- ・ 島根県環境保全課『宍道湖・中海 その環境と生物』一九九
- ・ 島根県教育委員会『ふるさと島根の環境 中学校用』一九
- ・ 松江市土木建築事務所『川の歴史研究会編』
- ・ 『川の歴史台帳』島根県文化財愛護協会 一九九三
- ・ 松江ハイキングクラブ・松江アルペンクラブ・出雲山の会編『出雲の山々』一九九四

五